

学 術 活 動

平成15年度福島県立医科大学看護学部公開講座委員会活動報告

根拠に基づく看護を求めて ～EBNの理解と活用～

本看護学部の公開講座は、教員で構成する公開講座委員会が、事務局の総務企画グループ大学企画担当者と協同して運営している。公開講座委員会委員は任期2年であり、今期の委員は平成14年度と15年度を担当した。平成14年度は主に地域住民を対象にした講座を2回、看護専門職を対象とした講座を1回開催したが内容はそれぞれ独立したものであった。15年度については14年度とは趣を異にし、対象を看護職等医療従事者に限定し、EBN (Evidence Based Nursing) について理解を深めることを目的に、『根拠に基づく看護を求めて ～EBNの理解と活用～』を年間の統一テーマとして開催することとした。

第1回は、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科阿部俊子助教授に、『EBN とは何か。(EBN 概論)』と題して御講演をお願いした。阿部先生はクリニカル・パスやEBNを日本の看護界にいち早く紹介した研究者として知られている。また、現在看護協会の副会長も務められており、御多忙なスケジュールの中、快く講演を引き受けていただいたことに改めて感謝する次第である。講演ではEBNの概念、EBNが注目された背景や経緯、EBNを臨床実践に導入するにはどのようにしていったらよいのか、といった基本的なことがらについて解説していた。

だいた。看護実践にエビデンスを持ち込むための活動について、ご自身のこれまでの具体的取り組みのエピソードを随所に交えたユーモアにあふれるお話は、参加者の爆笑をさそいつつも心に残るものであった。

第2回は、『感染管理におけるエビデンスの活用』と題し、聖路加国際病院 ICP (Infection Control Practitioner) の沼口史衣さんに講師をお願いした。わが国における院内感染対策専門家の先駆けとして、中心静脈ライン関連血流感染や尿道カテーテル関連尿路感染などの具体例について、これまで慣習として行われてきた処置等についてエビデンスをもとに再評価を行い、新たな対策を立案し実際に導入していった経緯について紹介していただいた。特に、施設内での感染対策の枠組構築の経験などを通し、「改革に対する“抵抗勢力”もエビデンスがあれば説得可能であることがわかった」との指摘は大いに参考になるものであった。

第3回は、本学部成人看護学領域の渡辺かづみ講師に『臨床判断とエビデンスの蓄積』と題してお話いただいた。これまで看護研究が臨床に活かされなかった原因から説き起こし、EBN実践のための情報の収集の仕方、収集した情報の活かし方について解りやすく解説していた。

統一テーマ『根拠に基づく看護を求めて ～EBNの理解と活用～』

回数	開催日	演 題	演者 (所属・職)	参加者
第1回	9/13 (土)	EBN とは何か (EBN 概論)	阿 部 俊 子 (東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科助教授)	163
第2回	10/24 (金)	感染管理におけるエビデンスの活用	沼 口 史 衣 (聖路加国際病院 ICP)	161
第3回	12/4 (木)	臨床判断とエビデンスの蓄積	渡 辺 かづみ (本学成人看護学領域講師)	111

だいた。また、現在ご自身が、「臨床看護師が『何かちょっと変』と感ずること」を、感性のレベルからエビデンスをもった判断とすべくすすめている研究についても紹介していただき、参加者は実際の看護活動にエビデンスを求めていくための研究の一端に触れることが出来た。

開学当初を除き、参加者はここ数年間、毎回数10名程度で推移してきたが、本年は各回とも100人を超える参加者があった。また、3回連続して受講する参加者が多く、EBNに対する関心の高さを再認識させられた。なお、第1回、2回に比べ第3回の参加者が減少している

が、本学医学部附属病院看護部の研究会と日程が重なり、附属病院からの参加が困難だったためである。反省点としては、昨年度の活動報告で「今後はワークショップ形式を採り入れるなど、地域の看護職者自身が主体となる公開講座も検討していきたい。」としながら、一方通行の講演のみで終わってしまったことである。今後の課題としたい。

平成15年12月19日

(公開講座委員会委員長：加藤清司)